

中間的読みと依存関係

加藤 勉

(人文学部 人間文化学科)

Intermediate Readings and Dependency

Tsutomu KATO

(Department of Humanities, Faculty of Humanities and Economics)

Winter (2000: 56-57) は、図1で示された状況の記述に関して、(1)の文と(2)の文とを比較している。(1)の文は状況を正しく記述しているが、(2)の文は状況を正しく記述しているとはいえない。

- (1) The circles are connected to the triangles by a dashed line.
- (2) Every circle is connected to the triangles by a dashed line.

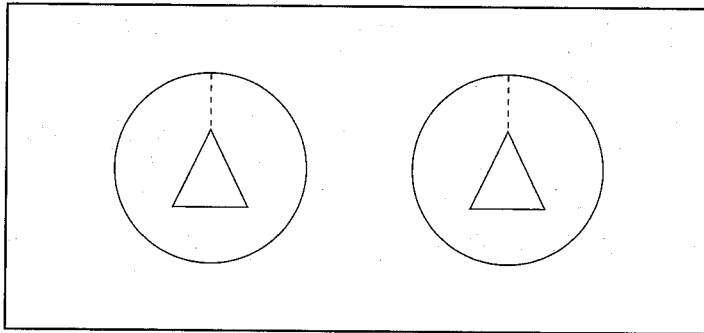


図1 Circles and triangles.

この相違は、Chomsky (1975) においてすでに指摘されている、依存複数 (dependent plural) に基づくものであるというのが Winter の主張である。依存複数の特徴は、形態論的には複数形であるものの、意味論的には単数名詞として機能するという点にある。(3) が依存複数 wheels を含む例であり、(4) は、(3) の複数名詞句主語をそれに対応する単数名詞句主語に変えたものである。(3) は意味的に問題はないが、(4) は誤りである、またはきわめて奇妙であるという判断をされる。これは、主語が複数名詞句ではないので、wheels が形態の通りに複数のものを表すためである。

- (3) \emptyset /all/the unicycles have wheels.
- (4) A/every/the unicycle has wheels.

この依存複数、従来配分複数 (distributive plural) と呼ばれているもので、*The Oxford Dictionary of English Grammar* (1994) の distributive の項には以下の記述がみ見られる。

(5) distributive

(*n. & adj.*) (A word or phrase) that relates to individual members of a class separately, not jointly.

Words like *each* and *every* are distributive words. Phrases like *once a week* and *three times per year* are distributive expressions.

Distributive plural concord is common in expressions such as *The children all had such eager faces* (where clearly each child had only one face), but a *distributive singular* is often possible, e.g. *They all had such an eager expression*.

この記述で配分複数が一致の一種として扱われている点は、重要である。一致は通常文法形式上の問題であり、意味は関与しないと考えられているが、数的一致に関しては必ずしもそうはいえない面がある (加藤 (1981) 参照)。配分複数が一致の問題として扱われる根拠は、以下のような意味論的もしくは語用論的な推論にあると考えられる。

(3) の場合、主語には unicycles という複数名詞が含まれており、まず、これが何を表しているのかを考える必要がある。裸の複数名詞 (bare plural) が含まれているので、Carlson (1977) などが主張するように、unicycle というひとつの種 (kind) に関する陳述が行われている可能性もあるが、have wheels というのは種が持ちうる性質ではない。さらに、具体的な unicycle の集まり (個 (individual) としての unicycle の集合) 自体が持つ性質でもない。つまり、集合的読み (collective reading) は成立しない。したがって、残る可能性は、複数の unicycles を念頭においた、個々の unicycle に関する陳述である。言い換えれば、(3) は配分的読み (distributive reading) を持つことになる。この場合、述部で表されている内容は、個々の unicycle に当てはまるものでなければならない。have wheels という性質は個々の unicycle に当てはまるものではない。個々の unicycle に当てはまる性質は have a wheel である。述部に have wheels が生ずるのは、主語に複数名詞が含まれているためにそれに依存したかたちで一致がおきるからである。

この一致自体は、複数の一輪車が想起されればそれに関係する車輪も複数個想起される、もしくは1台の一輪車にはひとつの車輪がついているという事態を複数想起することができるといった、何らかの非常に自然な心理的メカニズムを反映した結果であると考えれば、説明可能であるかもしれない。重要なのは、(意味論的なものであれ、語用論的なものであれ) 言語使用者は1台の一輪車がひとつの車輪を持っていることを知っており、この情報が(3)における依存複数の解釈を決定している点である。ただ単に、複数名詞主語があるために、それにあわせるかたちで、複数名詞が依存複数として解釈されるわけではない。依存複数の解釈を可能にしているのは、いわば、言語使用者が(6)で表される内容を、何らかのかたちで知っているという事実であろう。

(6) A unicycle has a wheel.

この点は、以下の文を考えてみれば明確になる。形式的にはいま論じた文と同じ構造を示しているので、wheelsが依存複数として解釈される可能性はあるはずである。

- (7) Bicycles have wheels.
 (8) A bicycle has (two) wheels.
 (9) A bicycle has a wheel.

(7)は(3)と対応する文であるが、(7)から(9)への推論は正しい推論ではない。形式的な点からみれば、この推論には問題はないと思われる。また、ふたつの車輪がついているならば、必ずひとつの車輪はついているという推論は、この場合には無関係であろう。さらに(4)に対応する(8)は全く問題のない文である。したがって、ある複数名詞句が依存複数の解釈(形式的には複数形であるが、意味的には単数であるという解釈)を許すか否かを決めるのは、あくまで主語複数名詞句が表している個体の性質に関する言語使用者の知識ということになる。

第一の重要な点は、依存複数含む文の場合、依存関係にあるふたつの名詞句が表す個体間の関係は1対1の関係であるということであるが、他にも主語複数名詞の表すものの性質により、たとえば1対2のような関係を内在させている類似した文が存在するという事実である。第二の重要な点は、術部内の名詞句の解釈が主語名詞句の解釈に依存しているということである。

これとは逆向きの依存関係が、Link (1995)の総称文に関する議論の中で扱われている。Linkは、(10)、(11)に現れている *manes* や *horns* などを依存総称名詞句 (dependent generic noun phrase) と呼んでいる。この名称は単数構文の総称文に現れる単数名詞にも適用されるが、その解釈を主語の名詞句に依存している。前述のように、裸の複数名詞は種を表す名称として使用されるが、*manes* や *horns* といった種は考えにくく、あくまで *lions* や *unicorns* に依存して解釈をされるという意味である。

- (10) Lions have manes.
 (11) Unicorns have horns.

依存総称名詞句が、主語の位置に現れた例が(12)、(13)である。どちらの文においても主語に対する総称性ないしは一般性が述べられているわけではなく、述語内に現れる要素に対する総称性ないしは一般性が述べられており、その意味で、上述の文とは逆向きの依存関係が存在することになる。

- (12) A train passes my house at noon.
 (13) A computer assists the expert in analyzing her data.

ここまでの議論で重要な点は、主語と述語内の要素の間に何らかの意味論的ないしは語用論的依存関係が見られる構文が存在し、その依存関係は、述語内の要素の解釈が主語の解釈に依存する場合と、主語の解釈が述語内の要素の解釈に依存する場合の両方があるということである。

Winter (2000)は、複数名詞句の解釈に関して一項の配分演算子 (unary distributive operator) を用いた、原子論的立場を取っており、基本的には配分的読みと集合的読みしか認めていない。Gillon (1987, 1990, 1992)などで論じられている中間的読み (intermediate reading) に対しては、依存複数の議論を用いた分析を採用している。中間的読みというのは、たとえば、(15)で示される状況のもとで、(14)の文が真となる時の読みのことである。

- (14) The composers wrote operas.

(15) 作曲家 (composer) はA、B、Cの3名。

AとBはふたりでオペラを1曲書いた (wrote an opera)。

BとCはふたりでオペラを1曲書いた (wrote an opera)。

その他に作曲されたオペラはない。

Winterは、(14)は、(15)の状況において直感的に真であるとのべているが、Gillon (1987)が中間的な読みを論じたときに想定した状況(16)とは少し異なった状況を想定して、依存複数の議論が関係するようにしている点に注意が必要である。Gillonが想定したのは次のような状況である。

(16) 作曲家(composer)はA、B、Cの3名。

AとBはふたりで複数のオペラを書いた (wrote operas)。

BとCはふたりで複数のオペラを書いた (wrote operas)。

その他に作曲されたオペラはない。

(16)の状況においては、作曲家一人一人が書いたオペラは存在しないし、3人がひとまとまりとなって(集合として)書いたオペラも存在しないので、(14)は配分的読みでも、集合的読みでも真にならないことはあきらかである。ただしWinterが指摘しているように、(17)が表す意味を持つ、不明瞭な読み(vague reading)も集合的な読み的一种であるとするならば、(14)は、集合的読みを持つといえよう。この読みは、単にoperasとcomposersの間に、wroteという関係が成立していることを示す読みであり、作曲家の間の協力といった意味は含まれない。Winterの主張は、この読みを成立させる特殊な状況のひとつが(16)であるということの意味している。

(17) There are operas that the composers wrote.

こういう中間的読みに対する真理条件を与えるために、Gillonはカバー(cover)という概念を導入している。カバーはある集合がある場合、その集合の、空集合を除く部分集合から構成される集合である。集合 $\{|A, B|, |B, C|\}$ は、集合 $\{A, B, C\}$ から構成されるカバーのひとつであり、 $|A, B|$ と $|B, C|$ はそのカバーのセル(cell)と呼ばれる。この考え方を採用すれば、複数名詞主語を持つ文が真となるのは、その複数主語が表すものの集合から構成される、各セルが述語の内容を満たすようなカバーが存在する時ということになる。これが、文(14)と(16)との関係である。ただし、(15)の状況に関しては、複数のオペラを書いたセルはないので、述部の扱いを工夫して(14)の目的語が複数形になっている理由を説明する必要があるだろう。

Winterのように、複数の配分は原子論的に行われる、つまり集合を構成する個々の要素に対して行われるのであり、カバーのセルのような中間的な、非原子的あるいは半原子的な要素に対して行われるのではないという立場にたてば、中間的読みは上述のように集合的な読み的一种となるのは当然であると考えられる。一項の配分演算子を持つ原子論的分析にとって問題となるのはむしろ、(18)や(19)のような文であろう。

(18) Every composer wrote operas on his own.

(19) There are some operas that the composers wrote together as one group.

主語の複数名詞句に分配演算子を適用した結果得られる(14)の配分的読みを表すのが、(18)であると考えられるが、(15)の状況においては、複数のオペラを書いた作曲家はいないので、このままでは Winter の主張は維持できないことになる。この問題点を解決するのが前述の依存複数に関する議論である。(14)の operas は依存複数としての扱いが可能な位置にあり、それに従えば配分的読みを正しくパラフレーズした(20)が得られる、というのが Winter の主張である。

(20) Every composer wrote an opera.

Winter の依存複数の分析について考察において述べたように、依存複数の解釈を行うには、主語複数名詞が表すものの性質自体がその解釈を可能にすることがはっきりしてはならない。この場合、composer と an opera の間にそのような関係があるか否かは、はっきりとはいえない。作曲家は複数のオペラを書く可能性が高いので、むしろ composer と operas との関係の方が強いと考えるのが自然であるように思われる。集合的な読みの場合も、後述するように、その集合がひとつのまとまりであるという解釈を受ける必要があるので、何らかの協力関係を表しているパラフレーズの方が自然であるように思われる。

Gillon の主張に対しては、Lasersohn (1989, 1995) の反論があり、Winter も基本的にはこの主張を採用して、カバーに基づく分析を認めていない。Lasersohn は 3 人のティーチングアシスタント (TA) がそれぞれ 7,000 ドルを支払われる状況を想定して、Gillon の分析の問題点を指摘している。カバーを用いる分析は、この状況下では次の 3 つの文はすべて正しいと予測するが、実際には中間的読みを必要とする (23) は、認められない。この読み自体は、3 人のティーチングアシスタントから構成される、 $\{\{A, B\}, \{B, C\}\}$ というカバーが予測する可能な読みである。

(21) The TAs were paid \$ 7,000 last year.

(22) The TAs were paid \$ 21,000 last year.

(23) The TAs were paid \$ 14,000 last year.

ここで、問題となるのは、文中で示されている金額が何と関係付けられているかという点である。金額が、個々のティーチングアシスタントと関係付けられている場合(配分的読み)と、ティーチングアシスタント全体と関係付けられる場合(集合的読み)の場合には問題はない。しかし、金額が 3 人のティーチングアシスタントのうち 2 人から構成される集団(集合)に関係付けようとする場合(中間的読み)には、両者を関係付けるのに十分な情報はなく、その関係付けは不適切になる。つまり、両者間に何らかの依存関係を作り出すことが非常に難しいものとなる。これは、Link の総称文の分析を考察した際に取り上げた、複数名詞主語と述語内要素との間の依存関係に関わる問題であると考えられる。今想定されている状況下で中間的読みを行おうとする場合、金額が関連付けられるべき対象がひとつのまとまりなすものであると考えることに対して十分な根拠を与える情報がないと考えられ、これが原因で中間的読みを要求する文が不適切であると判断されると推測できる。

Gillon (1990: 483) は、複数名詞主語と述語内要素との間の依存関係が強化される状況を想定し、文中でもその関係が明示的に示される例文を挙げて、Lasersohn に対して再反論を行っている。

(24) The TAs were paid exactly \$ 14,000 last year.

(25) The TAs were paid their \$ 14,000 last year

(26) A chemistry department has two teaching assistants for each of its courses, one for the recitation section and one for the lab section. The department has more than two teaching assistants and it has set aside \$ 14,000 for each course with teaching assistants. The total amount of money disbursed for them, then, is greater than \$ 14,000. At the same time, since workload for teaching a course's section can vary from one section to another, the department permits each team of assistants for a course to decide for itself how to divide the \$ 14,000 the team is to receive. Suppose that it turns out, as it very well could under such circumstances, that no teaching assistant is paid exactly \$ 14,000. Yet it seems to me that either of the sentences (16) [= (24)] or (17) [= (25)] could be truly affirmed, though neither sentence, by hypothesis, is true in virtue of either a collective or a distributive reading.

この状況設定が、2名のティーチングアシスタントからなるまとまりをこの状況のもとで極めて有意義なものにすることと、その有意義なまとまりと\$ 14,000の依存関係を強化することを目的としていることは明らかである。例文の述部に含まれる *exactly* と *their* は主語の複数名詞句が、Linkが総称文の分析で示したように、述部の\$ 14,000に依存した解釈を受けやすくしていることも明白である。

(14)の場合、特別な状況設定をしなくても中間的読みが受け入れられるのは、もともと作曲家とオペラの間には何らかの依存関係が存在しており、作曲家が協力してオペラを書くのは、十分に考えられる事態であるからだと考えられる。これに比べれば、ティーチングアシスタントと金銭の支払いおよび、支払い金額自体の依存関係あまり明白ではないし、作曲家の共同作業に対しては、共著とか共同執筆という概念を拡大したものが適用できるが、ティーチングアシスタントの協力や共同作業に対して適用できるようなはっきりとした概念はないと考えられる。Winter (2000)は、Schwarzschild (1996)に言及しながら、次の例文は、(15)の状況のもとで、(14)に後続させた場合、\$ 5,000は2人の作曲家からなるまとまり自体に関係付けられる、直感的に正しいと思われる中間的読みを持つと述べている。これも、*per opera*、*each opera*が1曲のオペラと関係付けられる2名の作曲家を想起させ(状況設定がそうなっている)、それに基づいた複数名詞主語の解釈を要求するからであろう。

(27) The composers earned exactly \$ 5,000 per opera.

(28) For each opera, the composers earned exactly \$ 5,000.

中間的読みは、一種の有標な読みであると考えられるが、その中でもここで議論した、パーティション (partition) [集合の各要素が一つのセルにしか現れないカバー]ではないカバーに対応する中間的読みに対してはさまざまな制約があると考えられる。意味的なものから語用論的なものまで関わっていると思われる。

(5)にあるように、配分的読みと集合的読みを要求する表現はたくさんある。パーティションに基づく中間的読みを要求する表現も、以下の例が示すように多くあるが、パーティション以外のカバーに基づく中間的読みを要求する表現は存在しないのではないと思われる。これは人間の言語の特徴や認知のメカニズム等に関わる問題であろうと考えられる。したがって、ここで論じた中

間的な読みを成立させるためには言語外の知識も含めたさまざまな要素が関わりあっていると考えるのは不自然ではなからう。

(29) The boys came in groups.

(30) Shoes are sold in pairs.

参考文献

- Carlson, Gregory N.(1977) *Reference to Kinds in English*. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Chomsky, Noam(1975) "Questions of Form and Interpretation". *Linguistic Analysis* 1, 75-105.
- Gillon, Brendon S.(1987) "The Readings of Plural Noun Phrases in English". *Linguistics and Philosophy* 10, 199-219.
- Gillon, Brendon S.(1990) "Plural Noun Phrases and Their Readings: A Reply to Lasersohn". *Linguistics and Philosophy* 13, 477-485.
- Gillon, Brendon S.(1992) "Towards a Common Semantics for English Count and Mass Nouns". *Linguistics and Philosophy* 15, 597-639.
- 加藤 勉(1981)「主語-動詞の数的一致について(Ⅰ)」『高知大学学術研究報告』第30巻, 人文科学, 79-87.
- Kato, Tsutomu(1997a) "On Intermediate Readings, Events and Membership Transparency". *Research Reports of Kochi University* 46, *Humanities*, 203-210.
- Kato, Tsutomu(1997) "Intermediate Readings and Membership Transparency". *Research Reports of Department of Humanities, Faculty of Humanities and Economics, Kochi University*, 5, 109-118.
- Kato, Tsutomu(1998) "A Note on Intermediate Readings and Meaning Postulates". *Research Reports of Department of Humanities, Faculty of Humanities and Economics, Kochi University*, 6, 59-65.
- Lasersohn, Peter(1989) "On the Readings of Plural Noun Phrases". *Linguistic Inquiry* 20, 130-134.
- Lasersohn, Peter(1995) *Plurality, Conjunction and Events*. Kluwer, Dordrecht.
- Link, Godehard(1995) "Generic Information and Dependency". In Carlson, Gregory N. and Francis Jeffrey Pelletier(eds.)(1995) *The Generic Book*, 358-382, the University of Chicago Press, Chicago.
- Schwarzschild, Roger(1996) *Pluralities*. Kluwer, Dordrecht.
- Winter, Yoad(2000) "Distributivity and Dependency". *Natural Language Semantics* 8, 27-69.

ABSTRACT

A sentence whose subject is a plural noun phrase can be susceptible to an intermediate reading, which is neither collective nor individual. The conditions under which intermediate readings are possible are very complicated. But it is clear that the dependency relation between the elements in a sentence has a very strong effect to the possibility of intermediate readings. I will discuss Winter's analysis of dependent plurals and Link's analysis of generic noun phrases, concerning the effects of dependency relation to possible intermediate readings. I also try to make it clear that semantic and pragmatic information greatly affects the possibility of intermediate readings.

KEY WORDS: intermediate reading, dependent plural, dependency

平成13年(2001)10月3日受理

平成13年(2001)12月25日発行

